

年末年始は、漠然とテレビを見るのではなく、ねらいをもって番組を選んだり、新聞や雑誌等に目を通したりすることで、いつも以上に多くの情報を得ることができる。この年末年始に出会った言葉の一つに「得意淡然 失意泰然」というものがあった。

ものごとがうまくいって得意なときほど、その喜びに溺れておごらず有頂天にならず、むしろ淡々と事に当たる。反対に、ものごとがうまくいかないとき落ち込んだときには、焦らず落ち着いてゆったりと構えて苦しみに沈み込まないということである。調べてみると、出典は中国の明代の人物である崔後渠（さいこうきょ）の『六然（りくぜん）』というものだった。

この六然は、幕末の勝海舟や陽明学者の安岡正篤などが愛用したことで知られているそうである。また「得意淡然 失意泰然」は任天堂の岩田社長をはじめ多くの著名人が座右の銘にしているそうである。不勉強な私は何も知らなかった。

このようなことはないだろうか。うまくいったときは、ついつい有頂天になり、わるいときには落胆して挫折を味わうというパターンを繰り返すということは。どちらかという、得意なときに淡然とふるまうことはできるが、失意のときに泰然とふるまうことは簡単なことではない。この「得意」と「失意」は、それぞれの場面を切り離して考えるのではなく、「禍福はあざなえる縄のごとし」の例えのように、ものごとがうまくいかなくなっても、あせらず、落ち着いて、時節の到来を待つべきなのであろう。誰でも調子のいいときがあれば調子のわるいときもある。

人は、ついつい大変に感じる時ほど、すごい幸運が訪れないかなと考えたりしてしまう。宝くじが当たらないかなどと。そもそも私のように買わなければ当たるはずもない。古代ローマ時代に生きたセネカという人は、「幸運とは、準備と機会（チャンス）が出会ったときに生まれるものだ」と言っている。

教員をやっていると、生徒の前に立つ以上、「得意淡然」にも増して「失意泰然」が求められる。「今日は〇〇先生、元気がないな。落ち込んでいるな。何かあったのかな」では困る。生徒に心配されているようではいけない。教員は生徒のことを心配するのである。とはいうものの、教員も人間である。落ち込みながらも空元気でがんばっているときもあるだろう。「得意淡然 失意泰然」なかなかむずかしい。だから座右の銘にもなり得るのである。

私が出会った「得意淡然 失意泰然」は、女子マラソンの鈴木亜由子選手（日本郵政グループ）の座右の銘としてである。鈴木選手は、今年行われる東京オリンピック女子マラソン日本代表に内定している方である。気がつけば、東京オリンピック・パラリンピックはもうまもなくである。鈴木選手をはじめ日本を代表する多くのアスリートたちが、オリンピック・パラリンピックに出るために、日本代表となるためにしのぎを削っている。東京で日本で夏季オリンピックが開催されるのは、約50年に1回のことである。このタイミングでオリンピック選手を目指すことができる人たちは幸運といえるだろう。だからこそ、このチャンスを逃したくないであろう。今までの競技人生では一喜一憂したこともあったかもしれない。しかし、「得意淡然 失意泰然」の境地に達しなければ、オリンピックの舞台には立てないのかもしれない。私はオリンピックには出ないが、「得意淡然 失意泰然」は会得したいと考えている。